

調査報告

薬学部2～4年生に対する海外留学，英語学習に関する意識調査

小林 文^{1, 8}，齋藤 勲^{2, 8}，沼澤 聡^{3, 8}，中村明弘^{4, 8}，
木内祐二^{1, 8}，橋本みゆき^{7, 8}，佐藤 均^{5, 8}，板部洋之^{6, 8}

- 1 昭和大学薬学部薬学教育推進センター
- 2 昭和大学薬学部病院薬剤学教室
- 3 昭和大学薬学部毒物学教室
- 4 昭和大学薬学部薬剤学教室
- 5 昭和大学薬学部薬物動態学教室
- 6 昭和大学薬学部生物化学教室
- 7 昭和大学国際交流センター
- 8 昭和大学薬学部海外学生実習・研修推進委員会

要 旨

【目的】昭和大学薬学部では，学生の海外交流活動を推進しており，海外の大学3校と学部間協定を結んだ．交流活動を安全かつ充実した内容で実施するため，学生の留学準備をサポートする必要がある．そこで，薬学部2～4年の学生を対象に海外留学の興味，英語に対する意識，日々の英語学習の実態などを把握することを目的に意識調査（アンケート）を行った．

【方法】6年制薬学部2～4年生の全学生に共通の質問（マーク8問，記述4問の計12問）のアンケートを実施した．（2010年11月～12月）

【結果】どの学年も6割以上の学生が留学したいと思っていた．留学したい目的は，半数以上が語学留学であった．2年生，3年生の半分以上は，協定校のことを知らなかった．自分自身の英語力に対する評価は低かったが，ほとんどの学生は英語の必要性を感じた体験をし，英語が必要と感じていながら，自己学習はしていなかった．少数の学生が行っている英語自己学習は，テレビやラジオなどのメディアを使ったものが多かった．

【考察】低学年程，留学への希望が高い傾向がある一方，低学年は協定校を知らない率が高かったことから，低学年時から留学に関する情報を提供すると同時に英語に親しむ必要性を感じた．全学年を通して，英語を勉強する必要があると考えていても，英語の自己学習にはほとんどの学生が取り組んでいなかったことから，英語セミナー等で学習のきっかけを与えることで留学も推進できる傾向が考えられた．

Key Words : 留学，英語，海外，自信

緒 言

近年、日本人学生の留学者数は減ってきている^{注1, 注2}。しかし、文部科学省や日本学生支援機構は、国際社会に貢献できる人材や次世代の社会を担う豊かな人間性を備えた創造的な人材育成とともに、国際相互理解の増進を目的として、海外への留学を推進している^{注3, 注4}。また、経済産業省、文部科学省、大学の官学が連携を組み、社会のニーズに合ったグローバルな人材の育成に向けた報告書が発表され^{注5}、経済産業省においても国内にとどまらないグローバルな視野での人材施策に取り組んでいる^{注6}。社団法人日本経済団体連合会は、2012年度に日本人学生の留学を支援するための奨学金制度を計画している^{注7}。また、文部科学省は、世界共通語と言われている英語に関しても「英語が使える日本人」として小学校から大学までの教育方針を打ち出し^{注8}、大学や研究機関の英語化を推進、英語による授業を増加させている^{注8}。さらに、将来の成長にむけた科学技術政策の重要課題において、国際競争を勝ち抜ける高度産業人材の育成を目指すことが、教育方針に反映されている^{注9}。

2007年昭和大学薬学部では海外に興味があっても英語に躊躇している学生がいることが懸念されたため、大学院に在籍している学生に対し、全大学院生に対して海外留学と英語に対する意識調査を行い、留学や英語学習を希望する学生の実態を探った。その結果、約8割の学生が留学や英語学習を希望していた(未発表データ)。一方、2008年に行った8大学工学教育プログラム・グローバル化推進委員会の「日本人学生の留学に関する意識調査」でも学生は留学に興味をもってい

るが、留学を阻害する原因として語学力が挙げられている^{注10}。

意識調査の後、英語学習を毎日する習慣を身につけることを目的とした英語学習同好会「英語サロン」の活動を実施した。サロンに参加した学生は、海外留学を実現させ、TOEICの点数も1年間で100点以上伸びる結果となった。そのことから「英語サロン」活動は、一定の成果があると確認できた。

昭和大学薬学部では、2007年から3年間、大学院 GP 事業の一環で海外留学推進事業を行い海外との協定校を増やす活動を行った結果、海外との協定校を3校(アメリカ オルバニー薬科大学、韓国 嶺南大学、タイ マハサラカム大学)に増やすことができた。これで昭和大学薬学部1年生から6年生まで各学年に海外留学のチャンスができたため、海外留学を促進する意味で英語に躊躇している学部学生を抽出する必要性があると考えた。

そこで今回、薬学部2年から4年の全学生に対し、大学院生に行ったのと同じ意識調査を行い、海外留学の興味度、英語に対する意識、また日々の英語学習の実態を把握する意識調査を実施したので、その結果を報告する。

方 法

6年制の薬学部2～4年生の全学生を対象に意識調査を行った。調査期間は、2010年11月～2010年12月とした。マークシート用アンケート計8問は、Excel を用いて分析をした。なお、回答選択肢以外の欄にマークした場合は、無効回答と判断し、有効回答数から除外した。

記述式アンケート計4問は、ChaSen(奈良先端

注1. 「日本人の留学者数について」文部科学省 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/22/12/1300642.htm

注2. 朝日新聞掲載(2010年12月22日号) <http://www.asahi.com/politics/jiji/JJT201012220081.html>

注3. 国公私立大学を通じた大学教育改革の支援「長期海外留学支援」文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/cyouki.htm?bcsi-ac-27B13F23D1003429=1BE9DC8C00000002p3KBEjUsTTDOdQB XV8UY6Eg7BJ/EGAAAAGAAANJIXQCEAwAAGAAAAIgbBAA=

注4. 独立行政法人日本学生支援機構法第三条 <http://www.jasso.go.jp/organization/jigyogaiyou.html>

注5. 「産学官でグローバル人材の育成を」産学人材育成パートナーシップグローバル人材育成委員会(平成22年4月23日)経済産業省 <http://www.meti.go.jp/press/20100423007/20100423007-3.pdf>

注6. 経済産業省における政策評価の結果およびこれらの政策への反映状況経済産業省 http://www.soumu.go.jp/main_content/000022829.pdf

科学技術大学院大学 松本研究室開発) 記述式アンケート計4問は, ChaSen (奈良先端科学技術大学院大学 松本研究室開発) の形態素解析による日本語自然言語処理システムを使用 (無料ダウンロード) し, キーワードを抽出した. 抽出方法は, 自由記載で書かれた語彙の名詞語を以下の①~⑤ (①名詞—サ変接続, ②名詞—一般, ③名詞—形容動詞語幹, ④名詞—固有名詞—組織, ⑤未知語) に分類し, 記述頻度の上位をキーワードとした. さらに, 大阪大学の樋口耕一が開発した KH Coder のフリーソフト^{注11, 注12}を用いて頻出語の階層的クラスター分析 (デンドログラム) を行い, 似ている語同士の出現パターンを調べる. 階層的クラスター分析は, 対象間の類似度 (距離) によって, いくつかのクラスターに分ける分析法で, 医学や生物学, 社会学, マーケティングまで幅広い分野で活用されている. 出現パターンの類似した頻出語の組み合わせがどんなものかをデンドログラム (樹形図) として形成し, 図の下の方で結合すれば頻出語同士の距離が短く, 類似度の高い頻出語同士であるといえる. この分析を行うことで, 2年生から4年生の実態を推察した.

アンケート内容:

マークシート用質問1. 在学中に, 海外へ留学するチャンスがあれば行きたいですか?

記述式アンケート質問1. 上記の質問で, ”いいえ” と答えた方は, なぜ行きたくないと思うのか理由を記述用アンケート1に書いてください.

マークシート用質問2. マークシート用質問1で, ”はい” と答えた方にお聞きします. 何を目的に留学したいと考えていますか? (複

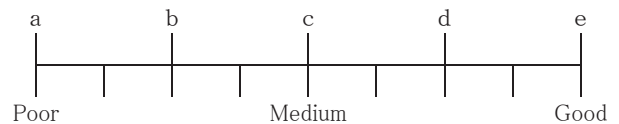
数回答可)

- a. 大学や大学院への進学
- b. 語学留学
- c. 授業の聴講 (サマースクール含む)
- d. 病院や薬局での実習
- e. 研究室での研究

記述式アンケート質問2. 上記以外の目的を考えている人は, 記述用アンケート2に目的を書いてください.

マークシート用質問3. 昭和大学薬学部では, 韓国の嶺南大学, タイのマハサラカム大学, アメリカのオルバニー大学と学部間協定校を結んでいます. そのことはご存じですか?

マークシート用質問4. 自分の英語力を自分自身でどう評価していますか? a ~ e の段階に○をしてください.



マークシート用質問5. 自分自身で “英語を勉強する必要がある” と過去に思った経験がありますか?

記述式アンケート質問3. マークシート用質問5. の質問で ”はい” と答えた方は, その経験を記述用アンケート3にも答えてください.

マークシート用質問6. マークシート用質問5. で, ”はい” と答えた方にお聞きします. 以下のどの部分ができたら良かったのに, と思いましたか? (複数回答可)

- a. Reading b. Listening
- c. Writing d. Grammar
- e. All (全分野)

注7. 「サンライズ・レポート」(2010年12月6日) 日本経済団体連合会 <http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2010/114.pdf>

注8. 「大学が有する知の利用」文部科学省 <http://www.mext.go.jp/bmenu/shingi/chousa/kokusai/003/shiryou/06090103/001/004.html>

注9. 「国際標準化に関する日本経団連の取り組みについて」日本経済団体連合会知的財産委員会 http://www.jisc.go.jp/policy/kenkyuukai/keizaisei/pdf/kenkyukai_sympo/3/yoshida.pdf#search='日本経済団体連合会国際人育成'

注10. 「日本人学生の留学に関する意識調査」8大学工学教育プログラム・グローバル化推進委員会 第3分科会 (北海道大学, 東北大学, 東京大学, 東京工業大学, 名古屋大学, 京都大学, 大阪大学 (2研究科), 九州大学) <http://www.eng.hokudai.ac.jp/jeep/19-20/iinkai.files/3kekka.pdf>

注11. 樋口耕一 テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—理論と方法19(1) 101-105(2004) http://www.jstage.jst.go.jp/article/ojjams/19/1/101/_pdf/-char/ja/

注12. KH Coder を使用した論文集 <http://khc.sourceforge.net/bib.html>

マークシート用質問7. 現在, 自ら英語学習をしていますか? (例えば, 英語スクールへ通う, NHK 英語講座を見ている, アメリカのドラマを見ている, など)

記述式アンケート質問4. マークシート用質問7. の質問で”はい”と答えた方は, 英語学習方法を記述用アンケート4にも答えてください.

マークシート用質問8. 皆さんの目標に到達するサポートとして, 英語学習や海外留学の状況などの情報交換, TOEIC 学習などの自由参加型のセミナーを設ける計画をしています. 仮に, 60分程度の自由参加セミナーを予定した場合, あなたは参加可能と考えますか?

- a. 1~2週間に1回なら参加できる
- b. 3~4週間に1回なら参加できる
- c. 参加することは, 難しい

結 果

表1に回収率を示す. マークシートの回収率は2年生がもっとも高かった. 一方, 記述用アンケートの回収率は2年生と3年生は70%を超えていたが, 4年生は約半数であり, 高学年ほど回収率が低下した.

表1 各学年におけるマークシートの回収率と記述用アンケートの回収率

学年 (生数)	マークシート回収数 (%)	記述用アンケート回収数 (%)
第2学年 (236)	209(88.6)	163(78.0)
第3学年 (194)	119(61.3)	90 (75.6)
第4学年 (190)	106(55.8)	55(51.9)

「在学中に, 留学するチャンスがあれば行きたいか」について「はい」と回答した2年生は79.9%, 3年生は73.9%, 4年生は64.1%であり, 学年が上がるほど低下傾向であった.

表2 なぜ留学したくないと思っているか?

各学年の形態素出現頻度順 上位3語

2年生	出現頻度	3年生	出現頻度	4年生	出現頻度
1	英語	1	英語	1	興味
2	留学	2	自信	2	海外
2	自信	3	苦手	2	英語

留学したくないと答えた学生に対し, 「なぜ留

学したくないと思っているのか」を記述により回答した各学年の形態素出現頻度順上位3語を表2に示した. 回答人数は, 2年生38人, 3年生25人, 4年生は27人であった. 出現頻度の1位は, 2, 3年生が, 「英語」であり, 4年生は「興味」が1位だった. 2位の出現頻度は, 2年生は「留学」と「自信」, 3年生は「海外」「英語」で同数であった.

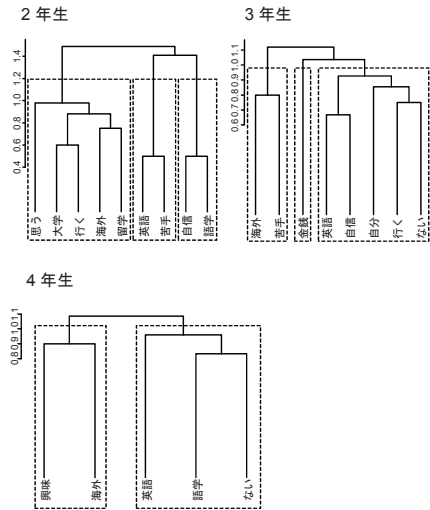


図1 階層的クラスター分析による各学年の留学したくない理由

図1は, 「留学したくないと思っている理由」を明らかにするために, 階層的クラスター分析を行ったものである. その結果, 2年生は, 全体を点線で示された3グループの出現パターンができ, 言語間の距離から「語学—自信」, 「英語—苦手」, 「大学—行く」, に似通った語の組み合わせがあった. 3年生も同様で, 「英語—自信」, 「行く—ない」, 「海外—苦手」, に似通った語の組み合わせがあった. 一方, 4年生は全体的に言語の類似距離間が, 2グループの出現であった.

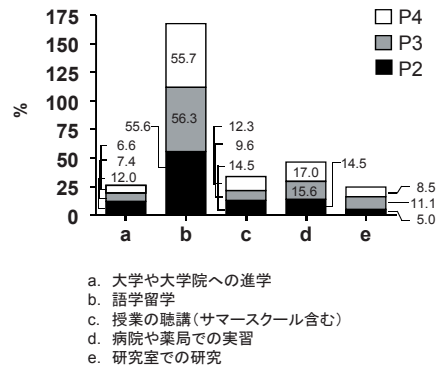


図2 何を目的に留学してみたいか?

図2は、「留学したい」と回答した学生に対し、その目的を尋ねた結果である。2年生は黒色で、3年生はグレーで、4年生は白色で示した。その結果、各学年の半数以上が「語学留学」を目的としていた。一方、2番目に高かった理由は、「病院や薬局での実習」(2年生14.5%、3年生15.6%、4年生17.0%)であった。

現在、昭和大学薬学部は海外との大学(大韓民国、タイ王国、アメリカ合衆国)と協定校を結んでいる。そこで薬学生に対し、この3校と協定を結んでいることの認知度を調査する目的で質問した。その結果、2年生が44.0%、3年生は47.5%、4年生では68.7%であった。

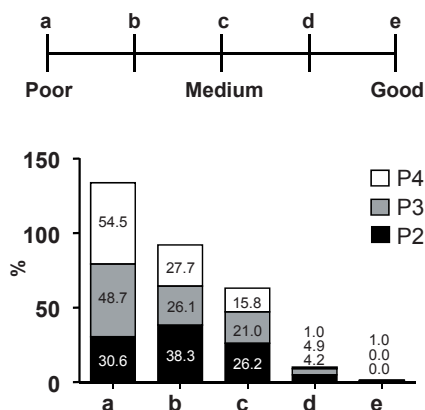


図3 英語の自己評価

図3は、学生自身が自己の英語力を自己評価した結果である。自己評価方法は、「a」を「poor」とし、「e」を「good」として該当するアルファベットに○をつける形式とした。その結果、「a」と回答した2年生は30.6%であったが、3年生では約半数(48.7%)の学生が「a」と回答した。さらに、4年生では54.5%であった。このことから、高学年ほど英語力が乏しいと答える割合が多かった。一方、「c」(medium)と回答した2年生は26.2%であった。

「自分自身で英語を勉強する必要があると感じた体験の有無」については、各学年のほぼ9割の学生が過去に英語を勉強する必要があると感じた経験を有していた。興味深いことに、高学年ほどこの割合は増加していた。

表3 英語を勉強する必要があると過去に思った経験
各学年の形態素出現頻度順 上位3語

2年生	出現頻度	3年生	出現頻度	4年生	出現頻度
1	英語	1	英語	1	英語
2	外国(海外)	2	外国(海外)	2	論文
3	授業	3	授業	3	外国(海外)

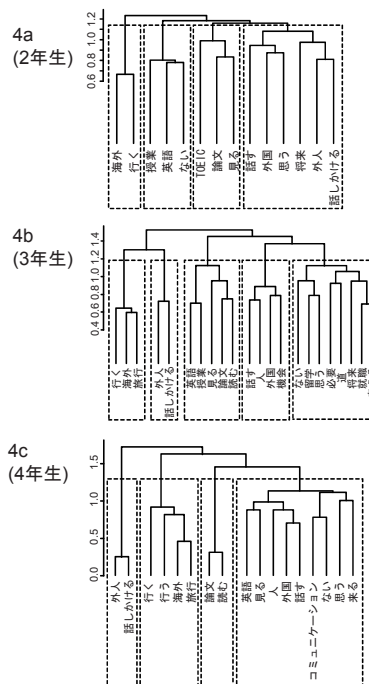


図4 英語を勉強する必要があると過去に思った経験

表3は、「英語を勉強する必要があると過去に思った経験」について、その理由を選択で回答してもらい、上位3語までを示したものである。回答人数は、それぞれ2年生が154人、3年生が86人、4年生が44人であった。図4は階層的クラスタ分析の結果である。図4aは2年生、図4bは3年生、図4cは4年生を示している。また、点線で枠組みした箇所は似通った単語の組み合わせグループ化したものである。その結果、2年生は全体を4つに大別でき、言語間の距離から、「海外—行く」、「英語—ない」、「外人—話しかける」、に似通った語の組み合わせであった。3年生は5つに大別でき、出現パターンの距離間から「海外—旅行」、「海外旅行—行く」、「就職—考える」に似通った語の組み合わせがあった。一方、4年生は、2年生と同様に4グループに分類でき、言語間の距離間から、「外人—話しかける」、「論文—読む」、「海外—旅行」、に似通った語の組み合わせがあった。

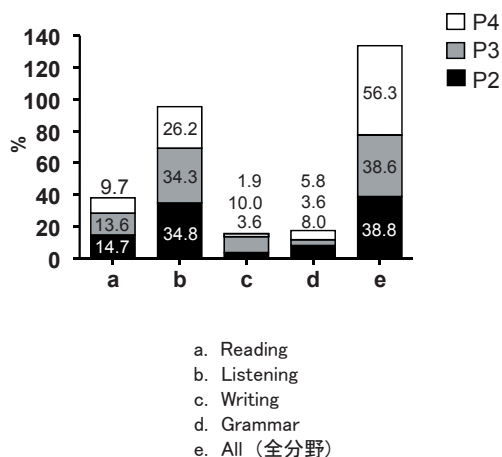


図5 英語のどの部分ができれば良かったと思いませんか？

図5は、英語を勉強する必要があると感じた学生に「英語のどの部分を勉強する必要があると感じたのか」を尋ねた結果である。その結果、全学年で、「b. Listening」が他の部分より勉強する必要があると感じた学生が多かった。また、2, 3年生は、「e. All (全分野)」と答える率とほぼ同等にa「Reading」を強化したいという回答が多かった。4年生では「e. All (全分野)」が必要と答える率が56.3%であった。

次に、「英語の自己学習をしているか」を尋ねたところ、どの学年でも9割前後の学生が英語の自己学習はしていなかった。一方、英語の自己学習をしている学生はどの学年も1割程度に過ぎなかった。

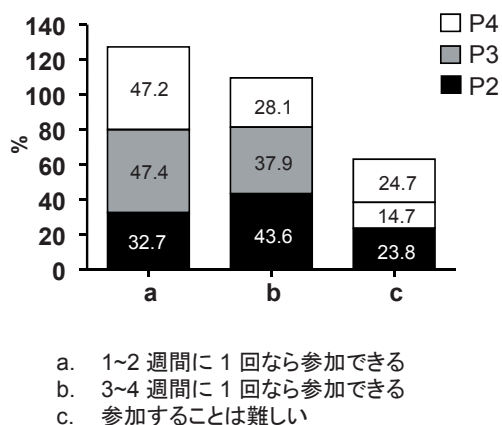


図6 英語サロンの参加頻度

図6は、「自由参加型の英語セミナーを企画した場合、どのくらいの頻度で参加できるか」を尋ね

た結果を示したものである。その結果、3, 4年生では「週1回が参加可能」と答える率が多く、一方、2年生では、「2週間に1回が参加可能」とする率が43.6%と最も多かった。しかし、参加は難しいと回答した学生は少なかった。

考察

本報告は、昭和大学薬学部の2~4年生を対象に海外留学に関する意識調査をアンケート形式で実施し、まとめたものである。その結果、どの学年でも高い割合で留学を希望していることが明らかになった。このことは、各学年に海外留学のチャンスを作る必要があると考えられた。現在、本学薬学部では、各学年に留学の機会を提供できつつあるが、4年生では希望する学生が減っている。このことから、低学年で留学させることで、4年生でも留学や英語に対する意識が違ってくるのではないかと考えられた。一方、留学したくない理由として、「英語」や「興味」のキーワードが挙げたことから「留学」と「英語」が密接に関係していることが考えられた。このことは、「英語」に対する抵抗感が少なくなれば留学への興味も上がると考えられる。

今回、階層的クラスター解析に用いたKH Coderは、新聞記事や質問調査の自由回答項目、インタビュー記録など、社会調査によって得られる様々な日本語を、テキスト形式でデータとして計量的に分析する目的で製作されたソフトで、現在多くの研究に使用されている^{注11, 注12, 1)}。階層的位クラスター解析の結果、2年生の留学したくない理由として、「語学の自信」や「英語が苦手」などが影響していると考えられた。一方、3年生は「英語の自信」という気持ちが影響していると考えられた。しかし、4年生では似通った語の組み合わせ距離が遠いことから、留学したくない理由は多岐に渡ると考えられるが、特に「語学がたりない」という気持ちが影響している傾向があると考えられた。

留学の目的は、どの学年も半数以上が「語学留学」であった。この結果は、8大学工学教育プログラム・グローバル化推進委員会の行った意識調

査と同じであった^{注10}。さらに、留学目的を自由記載でもアンケート調査を実施したが、記述数が少なくキーワード抽出もできなかったことから、選択式の回答内に留学目的がほとんど網羅されたと考えられる。本来、昭和大学薬学部が学部間協定校を結んでいる目的は、海外での薬学専門知識を学ぶ機会を学生に与える国際的な研究視野を持った薬剤師を育成することである。今回のアンケートの対象にした2～4年生は、高学年ほど専門知識を修得しているため、留学に対する目的や意識も変わっていくよう指導していく必要があると思われた。

昭和大学薬学部との協定校について、2年生と3年生の半数以上の学生は協定校のことを知らなかったが、高学年になるほど認知度が高かった。このことから低学年のうちから協定校を使って留学できるチャンスがあることを知れば、留学という目標ができ、4年生になって英語に自信がなくなっていく傾向も少なくなるのではないかと考えられた。

英語力に対する学生自己評価は、2年生では自分自身の英語力を普通より少し下と評価する率が高かった。しかし、3、4年生になるほど乏しいと答える率が高くなる傾向であった。このことから、低学年から英語学習を習慣づけることで、自分の英語力の維持に繋がるのではないかと考えられた。

英語学習の必要性はほとんどの学生が「必要と感じた」と回答したことから、学習を継続的に行うきっかけを学生に与えることで、苦手意識を克服できるのではないかと考えられる。さらに、英語を勉強するの必要を感じた経験をもつ学生は、自由記述の内容に「英語」や「外国・海外」といった頻出語が多かったことから、日ごろから英語や海外を意識できる環境にいると思われる。このことは、2年生は、「海外に行く時や英語ができなかった時」、「外国の人に話しかけられた時」などの経験から、英語を勉強する必要があると感じていると考えられ、階層的クラスター分析の結果を支持するものと考えられる。3年生は「海外旅行に行った時」や「就職を考えた時」に英語を勉強し

なくてはと感じる傾向があると考えられた。一方、4年生は「外国の人に話しかけられた時」や「論文を読む時」あるいは「海外旅行に行った時に英語を勉強しなくては」と感じる傾向があると考えられる。従って、日常生活の中で英語が必要と思った体験をカリキュラムの中に繋げていく工夫も必要かもしれない。

英語学習のポイントは、「Reading」、「Listening」、「Writing」、「Grammar」の4分野に大別できる。そこで、どの部分が出来たら良かったかについて調査した。その結果、学年によって学習ポイントが異なっていた。すなわち、2年生では「リスニング」を強化したいと考える傾向があったが、高学年になるほど「全分野」が必要と答える率が高くなった。このことから、2年生では「リスニング」を中心に教育すると、3、4年生になった時の留学や英語学習に対する姿勢が異なるのではないかと考えられる。

多くの学生が「英語が必要」と回答したにもかかわらず、自己学習を行っているのはどの学年も1割程度であった。自己学習は、「洋楽を聞く」、「ラジオ講座の受講」、「TOEICの問題を解く」、「海外ドラマや映画を字幕で観る」、「テレビでドラマを見る」、などであった。テレビやラジオなどのメディアを使ったものが多かった。

日ごろから出来る英語学習方法を学生に教えることで、英語を克服し、さらに留学への興味も高まるものと考えたため、自由参加型でかつ希望者のみで行う英語学習同好会（英語サロン）への参加について調査した。その結果、高学年ほど週1回の頻度ならば英語サロンへの参加可能と答える率が高かった。このことは、高学年で自身の英語に自信がなくなると英語セミナー等で学習したい気持ちも高くなることを示唆している。従って、今後さらに積極的な英語サロンの普及をする必要があると思われた。

今回の海外留学促進のための意識調査は2008年に薬学研究科博士前期課程の学生対象に行ったものとはほぼ同じ設問の内容である。大学院生の意識と比較すると、大きな違いはなかった。その後、1年6ヶ月間、大学院生と英語サロンの活動を

行った。サロンに所属した学生は、短期留学の実現、TOEIC700点台の獲得、さらに自身が希望する企業への就職できたことから、英語サロンの活動が学生の進路に何らかの形で繋がったのかもしれない。今回行ったアンケート調査でも留学に興味があるが語学力に不安を感じている学生が浮き彫りになった。一方、ほとんどの学生が英語を勉強する必要があると感じていたが、実際には自己学習をするには至っていない現状も明らかになった。今後、英語サロンの活動により、英語に対する苦手意識を軽減すること、留学への促進につなげること、各自の目標とする TOEIC で高得点を取得すること、そして将来、学生自身が希望する進路へ進むことができるようにしたい。

引用文献

- 1) 後藤佐昌子, 八軒浩子, 高田充隆 医療薬学
研究の変遷に関する計量的分析 医療薬学
37(1)21-30(2011)

Questionnaires survey of 2nd – 4th year pharmacy students in Showa University for the Study Abroad and English self learning

Aya Kobayashi ^{1,8}, Isao Saito ^{2,8}, Satoshi Numazawa ^{3,8}, Akihiro Nakamura ^{4,8},
Yuji Kiuchi ^{1,8}, Miyuki Hashimoto ^{7,8}, Hitoshi Sato ^{5,8}, Hiroyuki Itabe ^{6,8}

Pharmacy Education Center, Showa University School of Pharmacy

- 1) Center of Pharmaceutical Education, School of Pharmacy, Showa University
- 2) Department of Pharmaceutical Sciences in Hospital, School of Pharmacy, Showa University
- 3) Department of Biochemical Toxicology, School of Pharmacy, Showa University
- 4) Department of Pharmaceutical Sciences, School of Pharmacy, Showa University
- 5) Department of Pharmacokinetics and Pharmacodynamics, School of Pharmacy, Showa University
- 6) Department of Biological Chemistry, School of Pharmacy, Showa University
- 7) International Exchange Center, School of Pharmacy, Showa University
- 8) Committee of promoting international exchange programs, School of Pharmacy, Showa University

Abstract

【Purpose】 In Showa University School of Pharmacy, we have been promoting the international exchange programs and signed up the agreement at Albany College of Pharmacy, Yeungnam University and Mahasarakham University. It is necessary to support the study abroad for students to carry out exchange programs in security and practical. Therefore, we need grasp how much is interested in the study abroad, consciousness for English and actual situations of English learning by questionnaires for fourth-year students to second year.

【Methods】 We carried out the questionnaires (a total of 12 questions, 8 multiple choice, 4 written response) from fourth-year students to second year students (November to December in 2010).

【Results】 Many students hope for study abroad and one of the most frequent purpose is learning English. More than half of the 2nd and 3rd year students did not know about the exchange programs between three foreign universities. Their English evaluation was low, but many students have experiences to feel English necessity but they do not study English by themselves. A few students use the media such as television or radio for studying English.

【Conclusion】 It is a tendency that the more students in lower grade, the more interests in study abroad. But the lower class students do not know about sister schools of Showa University. It is necessary for getting along with English at the same time to promote study abroad within the lower grades period of time. Almost all the students do not do English self learning though they feel necessary to English, so we should give them opportunities to English self learning for raising the motivation to the study abroad.

Key Words : Study abroad, English, foreign countries, confidence

Received 4 April 2011; accepted 8 June 2011.

